

# 北海・オブ・ザ・デット

山本Q太郎

基地のある北海道、釧路の市内から海岸線に沿って伸びる国道三十八号。晴れていれば海岸側にはどこまでも水平線の見える太平洋。右側には枯れた葦の生い茂った広大な原野。どこまでもまっすぐに伸びている道路。吹雪で何も見えないが、今も昔もこの辺は何もない。総重量約八トン、排気量五千百二十CC、パワーゲート付日野レンジャーは軽快に三十キロの速度で走行中。丁寧に手を入れた甲斐があつて、エンジンも快調だ。湾岸ラジオは鈴木サントニーの懐メロが流れてるからまだ午後六時前。朝からの吹雪がなかなか止まず待っていても仕方がないので日が沈む前に出でた。

パンデミックからこっち、天気予報は無くなつた。衛星は飛んでも受信する組織はないし気象予報士もお天気お姉さんもいない。いつになつたら雪がやむのか知りたかつたら年寄りの方がサイコロよりは頼りになる。

鹿の群れや動物の死骸で塞がれることがあるこの道も、冬の間は凍りつき路面を雪が吹き抜けていく。道も悪いし視界も悪い。今日は欲張らずこれだけ届けて、西港のフェリー基地に帰るう。欲張つて事故る方が馬鹿馬鹿しい。届けものは配給食料、届け先は白糠の公民館まで。夏の間なら国道三十八号線をひたすら西へ片道大体一時間の距離だ。でも今は路面がスケートリンクみたいに氷ついてるし、視界は吹雪で三十メートルがいいとこ。速度はいつもの半分。事故つていいことなんて何もない。ただでさえ移民の我儘にイライラしている本部の人間に手間をかけると、後々まで何を言われるかわかったものではない。

「別にいいさ、三時間かかっても五時間かかっても」

配給センターもある西港のフェリー基地はギスギスして居心地が悪い。帰るのは遅ければ遅いほどいいらしい。本土からの避難者がいつも文句を言いにくるし、お偉いさんは大声で喚くだけ。イライラしたつて何も解決しないのに。日本は東京、大阪はもちろん仙台から南はどこも感染者で溢れでてるそうだ。九州や四国の確かな情報はない。感染者は映画のゾンビみたいに人を襲うらしい。本当だろうか。田舎者だと馬鹿にして適当な

」とを言つてゐるかもしだい。逆に嘘ならどんなにありがたいか。そんな嘘みたいな世界になつてもいい年。幸い市内の設備で足りてゐるし備蓄もあるから生活は変わらないけど、インフラは崩壊してゐる。テレビは札幌の放送局が定時報道をやつてゐるだけ。ネットはあらゆるサービスが止まつてゐるが、世界にはまだ人が活動してゐる都市がいくつかあつて、インターネット上の「//コニティ」で情報交換をしてゐるらしい。そう聞いた。メジャーリーグはやつてないし、youtubeは人を襲う人の映像で溢れてゐる。この時代CGでみんなフェイク画像を作る暇人はいないから多分本当なんだろう。もともと釧路なんてあっても誰もこまらない。そんな日本の端っこでひつそりと暮らしてゐたから実感はない。石油とガソリン、灯油やガスがあれば今までと同じ暮らしができる。もちろんないものはあるが、今はあるもので何とか回してゐる。都市がそつくり無くなつたから、芋も魚も買い手を失つて蓄えに回つてゐるくらいだ。食う人が減つたんだから、しばらくは保つだらう。

白糠は釧路管内で人口も少なく老人ばかり。市内に移つてくれれば無駄なガソリンを消費して食料を届けなくともいいんだが、それはそれ。死ぬ前くらいは好きにさせてやりたい。

ラジオは湾岸ラジオという番組を東京から逃げてきた来た合田という老人が放送してゐる。釧路の出身で昔東京のラジオ曲局で働いてたそうだ。テレビと違つて小規模でも運営できるらしい。唯一の広報機能として貴重だし、音楽がないと心が荒む。娯楽はラジオに頼りつきりだつた。チューニングメータをいじつてるとライトが人影を照らした気がして慌ててハンドルを切る。思わず急ブレーキをかけるが、ハンドルがロック。後輪が空回りしてケツをふつてしまつ。そのまま路面を滑り路肩の雪山に突つ込んで止まつた。

「危なかった」

深く息を吐いて落ち着くのを待つ。ミラー越しに様子はわからないに。ゆっくり切り返してさつきの人影を探す。こんな時間にいつたい誰だ。ヘッドライトも見えてただろうに路上に出るなんて。何もない道で良かつた。接触音もしなかつたからぶつかってはないだらう。ゆっくりと戻ると人影が見えた。じつと突つ立つたまま動かない。ウインドウを下げるとき冷たい空気が入つてくる。慌ててジャンパーに袖を通しながら叫んだ。

「あんた、大丈夫かい」

返事がない。よく見えれば頭にも肩にも雪が積もつてゐる様子が変だ。氣でも失つてゐるんだろうか。立つたままで？ しようがない。車を降りて駆け寄つた。

「どうしたのさ、そんなところにいたら危ないべさ、送つてくから車に乗んなさい」

雪が何重にも氷ついてよく見えないが、男は手を前に突き出したまま立つて居る。「コートも着ずにスーツだけで何時間も吹雪の中を歩いきたよつだ。服が凍りつき足元には雪が吹き溜まつて居る。いつたい何時間ここにいたんだろう。顔を覗き込むが雪に覆われて表情は見えない。肩を揺すつても反応はない。何が起つたのかわからぬけど、どう考へても死んで居る。マネキンだつたらいいのに。笑い話で済む。ひょっとしたら。面倒なことになつた。

「いやいやいやいや、どうしたもんだか」

レンジャーに戻つて無線で基地を呼び出した。

に四人のコートを着込んだ男たち。遅れて医者がくる。本土でゾンビを知つて居る男。「こいつはそつだな。ガチガチに凍つて居る。」「こいつはあれだ。ゾンビだ」「へー、これが。いや、話には聞いてたけど見るのは初めてだわ」「体温もないし生きてない。」「どつから来たんだ。

海岸ラジオは滝川二ナのダンスミュージック。もうこんな時間が、今日中に配達は無理そうだ。公民館の人間ももう寝てるだろう。車に乗つて保安部の須賀さんを待つあいだ、ヘッドライトに照らされた男を眺めていた。何時間も前からこの状態だったようだ。無線の感度は悪かつたがちゃんと伝わつただろうか。誰かが窓を叩く音で目が覚めた。いつの間にか寝ていたようだ。外は暗くてよく見えないが、須賀さんのハイゼットと医療班のものらしきステーションワゴン。車から出たくないが仕方がない。

「わざわざみません。自分じや判断できなかつたもん。それが誰かわかりましたか」と須賀さんに聞いてみる。

「いやー、今の状態じゃ難しんぢやないかい。行方不明の届出は基地に行かないとわかんないから今はなんとも言えないね。秋山さんに見てもらつてるけどね。私らもいじやじうむじうもないわ」と言われた。ひとまず医者らしき秋山さんの作業を見守つて居る。明山さんは車に行つたり戻つたりした後我々を手招きをした。

「ひょつとここ持つてもらつてもいいかい」と言つて凍りついた男の右手を持ち上げる。

「秋山さんその前に、この人誰か分かつたかい」と須賀さんが聞いた。

「ああ、これはアレだね」と秋山さん。須賀さんと顔を見合わせる。アレってアレだらうか。須賀さんもそう思つてゐに違ひない。

「アレってアレかい？」

「ああ、これはアレだね」

「なんでわかるのさ」

「それはこれさ、こゝみてもうつてもいいかい」と語つて秋山さんはスーツの男の指をとつた。ライターで炙つたのか、右手の指は五本とも氷が溶けて素肌が見えている。そしてそば指がピクピクと動いている。

「うわ」須賀さんと俺は同時に大きな声を出して後ずさつた。

「生きてるじゃないですか、救急車を呼ばないと」と須賀さんが語つた。俺もそう思った。慌ててレンジャーに戻り無線をとり救急チャンネルを回し場所を伝えた。助手席の毛布を持って負傷者まで戻ると須賀さんと秋山さんは何やら話し込んでいた。

「須賀さん怪我人だ。手当すればまだ間に合うかも」と声をかけても返事はない。

「丈二君、やっぱりこの人手遅れだとだとせ」

「でも、さつき生きましたよ」

「動いたけど、生きてない。アレなんだとか」

「アレってアレかい？」

「どうやらゾンビみたいだね」

本当だらうか。感染症患者が海を渡つてきたといふニュースはまだ聞いていない。だけど北海道の海岸線全てを監視するのは不可能だ。世界の情勢を聞く限り、一週間の間に連絡の途絶れるコロナウイルスはいくつかある。日々いくつかの生きている人のコロナウイルスはゾンビに襲われてなくなつてゐつておるんだ。他に百人単位のコロナウイルスが突然なくなる理由なんてない。

「だとしたら大した大事なんぢやないかい」と須賀さんに対応をせまる。

「いや、丈二の言う通りだわ、本部に連絡するから、あんたは秋山さんを手伝ってくれるかい」

「わかった」と答え秋山さんの指示を仰いだ。衛生班の車にある防護服を着て工具箱を運ぶ。「よし」と言って次にやることを教えてくれた。指を切り取りサンプルとして持ち帰る。他はこの場で解体。氷が溶けると動き出すから明日の朝までには首を胴体から切り離すように。そう言って溶かした右手の指四本をボルトカッターで切り離しタッパに入れ車で帰ってしまった。気がつけば須賀さんもない。そういうえば基地で揉め事が発生したから戻ると言つていたようだ。

改めて感染者を見てみる。映像では何度も見たけど直に見るのは初めてだ。何日外にいたのかわからないが、芯まで凍っているように見える。本当にこれがゾンビだろうか。秋山さんが騙すとは思えないけど、間違うことはあるかもしれない。これを解体し終わって間違いに気づいたら、俺が人殺しになるんだろうか。一人がびびつて裏口を合わせられたらおしまいだ。念の為、左の指も解凍してみよう。だがどうやって。今は配達の途中だ。ゾンビを解体する道具なんかない。くそ、秋山さんに借りればよかった。凍りついた遺体をバラすには何が必要だ？ 車の工具箱なら何かしらあるだろうか。

ドライバやスパンは使えない、ペンチはまだ使えそうだがこんなにガツチリ凍つてるのはどうにもならない。他に何か。ジャッキで挟むのはどうだろう。金槌で折るのが早いか。

「くそ、こんなこと、なんであんたこんなところにいるんだ馬鹿野郎。あんたさえいなけりや、配達もとっくに済まして飯を食べてゐのに」手が冷たくて金槌でうまく狙いが定まらない。何度も打ちつけるうち小指が折れた。

「やつた、小指が折れた。これを溶かしてみれば……」

でもどうやって。体温で溶かすのは嫌だ。ライターがあればいいけど、タバコをやめてからは持ち歩いてない。そうだ車のシガーライター。車内には段ボールもあった。なんとか火をつけ指を炙るとピクピクと動き出した。

「うわ」

思わず放り出す。正直、気持ち悪い。じばらくみると動かなくなつた。凍つたんだろうか。どうなんだろう。これがゾンビか。こんなものどうしようと。もう、二十四時を回っている。時間が経てば経つほど体が冷える。このままじゃ俺が氷りついて死体が二つになつてしまつ。

「しょうがない。やるか」

秋山さんの『』とおりこれがゾンビだったら大変なことになる。手伝いが来るまでできることをやっておよう。首を切り離すために遺体を倒して寝かせる。これはどうみても人間だ。人の首を切り離さなきゃ家へないなんて。いざとなつたらなかなか踏ん切りがつかない。体はどんどん冷えてく。

「なんでこんな目に」

いつの間にか面倒なことになつてしまつた。逃げ出したいが仕方ない。首はジャッキで挟むにはが太すぎる。ドライバーを突き立て氷を削るか。三十分たつて何ミリも削れた感じはしない。首は完全に芯まで凍りついていた。試しにマイナスドライバーを金槌で叩いてノミみたいに突き立てるか、一打ちしただけでドライバーが折れてしまった。くそ、ダメか。やばい、指がかじかんで動かなくなっていた。ノコギリかチエンソーが必要だ。慌ててもう一度無線で助けを求めた。相変わらず感度が悪くちゃんと伝わっているか確信はない。それまでに何ができる。火で炙つて氷を溶かすか。指を溶かしたのと同じ要領で首を炙るがダンボールくらいじゃどうにもならない。もっと時間をかけて燃えるものが需要だ。

吹雪で見えないが枯れ草と木の枝くらいはいくらでもあるはずだ。それを燃やせればダンボールよりマシだろう。手探りで枯れ草や枝の山を作ることに何時間もかかった。集まつた枯れ草も枯れ枝も乾燥してゐるが凍つてゐる。ダンボールじゃ心もとない。

「あ、配送品」

荷台の配給品にサラダ油があつたはずだ。レンジャーは冷凍車だが荷物は凍つてない。断熱効果の高い冷凍車だから品物を凍らせずに運ぶことができる。案の定すぐ使える油があつた。風が強いので、雪を集めて小さい風よけを作り、中にサラダ油をかけた枯れ草を入れて火をつける。

「やつた、燃えた」

少しづつ集めた草や枝を焚べて火を強くする。そこに遺体を引きずつて、首の部分が温まるようにセットした。

うまくいったようだ。表面の雪が徐々に溶けている。折れたドライバーで押してみると皮膚はまだかたい。中はまだ凍りついているようだ。待つ間にもう一度無線で基地を呼び出したが、応答はなかった。誰か道具を持ってくれてるんだろうか。だんだん東の空が明るくなってきた。ただ見ているだけだと寒くて眠くなつてくる。

「溶けるまで車で待つか」

「ドアを開ける。と「ぐりゅう」と人の声がした。気のせいか。風が吹き抜けて妙な音がなつてゐるだけだろうか。

「脅かすな」とトラックを叩くと「わう」と声がした。誰だ。見回しても誰もいない。いたとしても吹雪で見通しが悪い。トラックの影、無線、ラジオを調べてみたがおかしな音はしていない。物音は外から聞こえた。ちくしょう。車から降りて確認しなくちゃ。一步外に出ると寒さで背筋が伸びる。吹雪が当たつて頬が痛い。耳を澄ますと風に紛れてガサガサと音がした気がした。もう帰りたい。どうしてこんな目に。寒さでかじかんだ手首を揉みながら遺体をみると火が消えかけ、風除けに作った雪の山が崩れている。直そうと近づくとソレがうううと呻き声を上げた。

空が明るくなつてきた。今の時期は曇でも氷が溶けるほど気温は上がりしない。とはいってもこれは現実だろうか。さっきまでカチカチに凍りついてた人間が動いて呻き声を上げている。どうなつているのか、わけがわからない。頭の悪いおれが考えてどうなるつてんだ。

「くつそー、誰かー、誰か来てくれー」

アレを火から降ろして頭を足で押さえて、首をドライバーで突く。凍った首はだいぶ溶けているようだ。表面が少し柔らかくなつていては気になるが腰をかがめて無心に首を突く。突かれると痛みがあるのか知らないが、アレが呻き声をあげる。首は肉のショーベットみたいになつている。それでも皮膚の下はまだ硬い。

「くつそー、削れる気がしねー」

これじゃいつまで経つても終わらない。他に使えるものを探す。工具箱をひっくり返しても使えそうなものはない。何か、何かないか。荷物は食品ばかり、荷台には雪用のタイヤチェーンと雪かきスコップ、滑り止め用焼き砂、毛布に台車。折り畳みの小さなノゴギリくらい工具箱に入れておいてもいいかもしない。

「くつそ、寒みい」

動きを止めると汗が冷える。指先の感覚はもうない。なんかないか、なんか。アレはこっちを向いてうめいでいる。こっちを向いて？　おい、首が回ってるじゃないか。どういうことだ。みると頭を覆っていた雪はすっかり溶けている。顔は水分が抜けたのかシワシワだ。目をしつかり見開いてこっちをみていろ。どうなってんだ。明るくはなってきたけど吹雪は止んでないし、路上の氷も溶けてない。だから体温は上がりっていない。車の下の路面は溶けているがそれはエンジンの熱だ。

「あー」

風除けのために、車の近くにアレを寄せていたからエンジンの熱で溶けたのか。足を持つてエンジンから引き離す。呻き声は止まらない。「えりつする」雪に埋めようか。もう一回凍らせればいいじゃないか。それで助けを待とう。鋸があればすぐに終わる。荷台からスコップを取り出し、道端の雪をあれにかけた。

待てよ。手元のスコップは雪かき用で四角い平スコップだが先は鋭い。そしてコレはどうみても人間じゃない。頭を踏みつけ、首にスコップを突き立てる。スコップが首に少し埋まった。やつた、いけそうだ。無心にスコップを振り下ろす。少しづつ首の肉が削れていく。いけるいける。何度も何度もスコップを振り落とす。こんな重労働はいつ以来だろう。腰は痛いし腕がだんだん上がらなくなってきた。これはきつい、ついにスコップを振り上げたときふらついた。なんだ。足も限界か。バランスを崩して尻餅をついてしまった。が、起き上がるうとすると、足が突つ張る。みるとあいつが呻き声を上げながら俺のブーツに噛みついていた。丈夫なブーツだから気が付かなかつた。動画で見たけど、噛まれると感染るんじゃないかなつただろうか。慌てて足を抜き確かめる。靴はなんともない。防護服も破れているところはなかった。なんだってこんなことをしなきやいけないんだ。手頃な石を持ってきてあいつの口にぎゅうぎゅうになるまで押し入れ靴で踏んでさらに押し固めた。呻き声は漏れるが、もう口を開じることはできない。

危なかつた。汗をかいているが、寒気がする。足先と指の感覚はない。もうくとくとだ。スコップを振り上げる力もない。コイツをどうしたもんだろう。その時、吹雪地は違う音が聞こえた。明かりもちらりと見えた気がした。

きてくれたのは、須賀さんだつた。とにかく俺のレンジャーに避難する。体は芯まで冷えてしまった。須賀さんが慌てて駆け寄ってきた。

「大丈夫だったかい。いやいやいや、すまんね。港の方で怪我人が出たからって呼ばれたのさ。滑つて転んだだけだつて言つても年寄りだから骨までやつちやつて大騒ぎさ。病院行つて医者起こして見てもらつて帰つてきたら秋山さんいるから、ジョージ君どうしたのさつて聞いたら、知らねえつてさ。どうしたかと思つたら、無線のメモがあつたから飛んできたんだ。いやもう、帰るところで見つかつてよかつたわ」と事情を話していくが、どうでもよかつた。他にも数人が車から降りてきた。避難民の中からゾンビを処理したことがある人を連れてきたそうだ。テキパキと作業をこなしている。あたりに石灰をまき、一人で頭と足を押されて一人がゆっくりとノコギリを引いて首を切り離す。そのまま両足も根本から切り離しバラバラにして袋に詰めた。

「あんなの持つて帰つて、どうすんのさ」と聞いた。

「そんなこと言つても、何があるかわかんないんだとさ。このまんまにしておくわけにはいかないっしょ。キツネとか食べたらどうなるかもわかないしね」と魔法瓶から熱いお茶を注いで勧めてくれた。これはありがたい。指からじんわりと熱が広がる。静かに啜つて飲み込むと熱い塊が喉から膚へ落ちていく。何が原因か、どうやつなつたら感染するのか、三年も経つているのに何もわかつていな。

「海は渡れないつて聞いたけど、なんでこんなところにいるのさ?」と須賀さんに聞いてみた。一応基地の人間だから、情報は俺よりも持つてるだろう。

「いやー、聞いてないんだわ。テレビでもなんも言つてなかつたし、そもそもわかる人がいるのかどうか」とぼやいている。誤魔化してる感じもない。とにかく、死体が片付いてよかつた。今後はあんまり白糠の配達は受けないようにしよう。

助けに来てくれた人が、車にアレの入つた袋を積み込む頃には口は高くなり吹雪が弱くなつていた。配達は須賀さんが別な人を呼んでくれた。そのまま車運転しても事故を起こしかねない。すこし休もう。シートを倒して眠るに入る間際に、須賀さんが窓を叩き叫んでいる。無視しようかと思ったが、ドアの取手をガチャガチャと引くので仕方がない。起き上ると晴れ上がつた海岸線。国道三十八号はどこまでもまっすぐ続き、横には

砂浜と水平線が連なっている。その広く見渡せる景色にポツンポツンと人が立っている。両手を前にあげ、身動きもせず。それが見渡す限り何体も何十体も。道路の向こうまで、海岸にも、草原にも。